

# 開導聖人を支えたご信者物語

## 第5回



200th Anniversary  
佛立開導日開聖人のご生誕200年慶讃

秦新蔵さんは、明治十四年（一八八二）一月十八日、五十七歳でお亡くなりになったんだけど、そのあとを継いだのが、新蔵さんの息子の繁松（三男）なんだ。繁松は二代目の秦新蔵となり、初代の秦新蔵さんと同じように熱心に奉公に励まれたんだよ。今回は二代目の秦新蔵さんのお話をするね。

### 二代目

### 秦新蔵

にだいめ

はたしんぞう

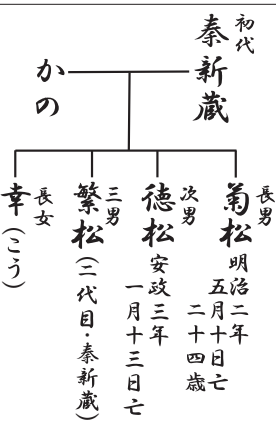
秦新蔵さんの家族は、妻のかの、長男の菊松、次男の徳松、三男の繁松、長女の幸の六人家族だったんだね。でも、次男の徳松は二、三歳の頃に亡くなっているんだ。

長男の菊松は、父の新蔵さんと一緒に佛立講のご信心に励み、青年信者として熱心にご奉公をしていたんだ。また、三男の繁松も十三歳で宥清寺の修学所（ご信心を学ぶ学校）に入学。「清高」と名前を付けてもらって書道や読書、仏さまの教えなどを学んだんだ。将来の「お教務さん」として期待されていたんだよ。

ところが、明治二年（一八六九）五月十日、お兄さんの菊松が二十四歳の若さで亡くなってしまったんだ。三男の繁松は、父の新蔵さんの家業（その家に伝わってきた職業）を継ぐ（あとを受けて続ける）ため、修学所を出て大阪の実家（自分の生まれた家）に戻るようになったんだよ。

明治十四年（一八八二）一月十八日、秦

### 秦家系図



秦家の家系図

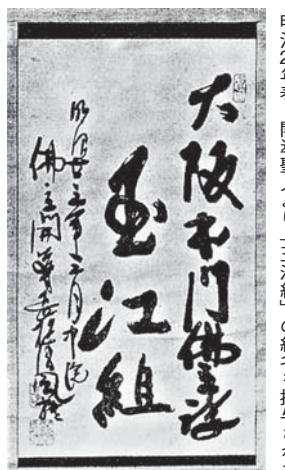


秦新蔵さんは開導聖人をお招きするため屋形舟を新調された

新蔵さんが亡くなり、三男の繁松が「二代目・秦新蔵」となるんだ。

二代目の秦さんも、お教務さんを目指していただけあって、ご信心に対してはとても熱心で、明治二十二年（一八八九）、自分の家の一部を親会場（お寺）として寄付（お金や物を贈ること）した。また、明治二十三年（一八九〇）の春には大阪のご信者をまとめ、玉江組（現本成寺）という組を作ったんだ。そして、二代目の秦さんがその組の講元（中心となって世話をする役）となったんだね。

明治二十三年七月十七日、開導聖人が京都から大阪の秦（二代目）さんのお家に来て、つて来られてご奉公される日。秦さんは、



明治23年春、開導聖人より「玉江組」の組名を授与された

開導聖人が道中（目的地へ向かう間）お疲れにならないようにと、屋形舟（家の形の屋根を付けた舟）を新調（新しく作る）されたんだよ。

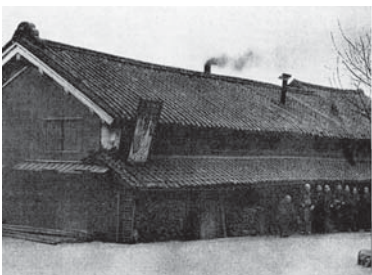
しかし、開導聖人は、大阪・守口の森田伊六さんの茶屋（旅人が立ち寄って休憩する所・現義天寺）に舟をとめ休憩していたところ、ご遷化（位の高い僧が亡くなること）されるんだね。

舟はそのまま大阪に向かい秦さん宅に着。その日の夜、秦さん宅でお通夜が行われたんだ。秦さんの妹の幸さんが徹夜（朝まで寝ないで）して白い絹で着物を縫い開導聖人にお着せしたんだ。翌日、開導聖人のご遺体は納棺（死体を棺に納めること）され、ご信者が御題目をお唱えする中、汽車で大阪梅田駅から京都に奉送（身分の高い人をお見送りすること）されたんだ。

こんなふうに二代目の秦新蔵さんも、初代の秦新蔵さんのように、開導聖人を尊敬し、最後の最後まで熱心にお給仕（世話をする）こと）されたんだね。



明治二十八年（一八九五）八月一日、二代目の秦新蔵さんは亡くなるんだ。秦さんに与えられた法号（亡くなった人が御導師や御講師からいただいた名前）は「長講院清高永繁日新居士」で三十九歳だったんだよ。



秦さんは自宅を寄付し親会場（お寺）となった。親会場の外観と内部の見取図